

パリ通信・第151号

カラヴァッジョ「聖ルチアの埋葬」

パリ・オリンピック開催を目前に控え、フランスでは七夕総選挙が行われた。ヨーロッパ連合議会での極右台頭を受けてマクロン大統領は下院解散総選挙に踏み切った。577議席を争う2回の国民投票(6/30と7/7)はともに67%を超える高い投票率だった。第一回投票で半数近くの議席を獲得した極右に過半数を取らせないのが7/7決戦投票の鍵となった。幸い極右の過半数という最悪のシナリオは免れたものの、与党、左派連合、右派連合の三つ巴となり、オリンピックと夏のバカンス中の政治混乱を避けるため、マクロン大統領は首相任命を先延ばしにしている。誰が首相になっても混沌とした政治不安は続きそうである。

7/26オリンピック開催式テロ対策も本格化している。セヌ川を選手団が船で入場行進するという類稀なオープニングの安全を確保するため、川岸には高さ2mのバリケードが張り巡らされている。毎年日本の学生さん達のパリ語学研修サポートを行なっているが、今年は交通規制や入場規制で7/13を以って研修を終了した。

仕事がひと段落したので、オリンピック熱で沸騰するパリの喧騒を逃れてイタリアに来て

いる。シシリア島東海岸のシラクーサとメッシーナを見る2週間の旅。パリから飛行機で2時間40分でカタニア国際空港に到着。標高3357mのエトナ山を遠くに見ながら空港から高速バスに乗って1時間。チュニジアが近いことを思わせる乾いた広大な大地、熱い太陽と抜ける青空、ブーガンビリエの花が美しいシラクーサに到着した。これまで見てきたイタリアの風景とは全く異なり別の国のようで昼間はジリジリと焼ける日差しで15時過ぎまではどこも閉まっている。



シラクーサで見たかったのがカラヴァッジョ「聖ルチアの埋葬」である。カラヴァッジョ(1571-1610)(本名ミケランジェロ・メリージ)が1608年シラクーサで描いた大きな祭壇画(408 x 300 cm)だ。暴力沙汰や訴訟が絶えなかったカラヴァッジョの生涯で、1606年5月ローマで喧嘩から殺人を犯したことは致命的だった。マルタ島へ逃れマルタの騎士団に身を寄せる。しかしまたしても暴力沙汰を起こし投獄されるも脱獄、1608年10月シシリア島シラクーサに船で辿り着く。1609年にはメッシーナに移動しており、ごく短いシラクーサ滞在中に描いたのがシラクーサの守護神「聖ルチアの



埋葬」である。



フランシスコ・デ・スルバランス
「聖ルチア」(シャルトル美術館蔵)

シラクーサの裕福な家庭に生まれたルチアは4世紀初頭に咽喉を切られて殉死する。名前(ルーチェは光の意)から「目」の守り神としても知られ、宗教画では棕櫚の枝を持ち両目を皿に乗せて描かれることが多い。

カラヴァッジョ「聖ルチアの埋葬」は画面の上半分には何もない。地面に横たわるルチアの咽喉は切られて傷口が開いている。大きく遅しい二人の男がルチアの墓を掘っている。ルチアの死を嘆き悲しむ人がある。赤い衣の若い司祭が手を合わせている。劇的なルチアの死は同時にルチアの死の勝利を暗示している。横たわるルチアは左手に永遠の死を象徴する

「棕櫚の枝」を持っている。二人の墓掘り人の四肢が形作るアーモンド形「マンドルラ」はルチアの永遠の死を祝福し、天に上る魂の勝利を祝福しているかのようである。

赤い衣は
キリスト

の血を象徴すると同時に愛を象徴する色でもある。

殺人犯として追われるカラヴァッジョがルチアの死に自らを重ねたとしてもおかしくない。レアリスム、光と影の画家として名声を成した芸術家としてではなく、1610年、38歳で悪人としてこの世を去る一人の人間としての存在を残したいと願った作品ではないだろうか。シラクーサからメッシーナ、パレルモを経てナポリへ渡り、法王の恩赦を求めてローマに向かうが小さな港町ポルト・エルコルで病死するまでの2年間に描いた最後の作品には画家として頂点に達したローマ時代にはない無の空間がある



カラヴァッジョ「聖ルチアの埋葬」

聖人の死は人の死と重なる「聖ルチアの埋葬」は「一粒の麦が地に落ちて死ななければ一粒のままである。死ねば豊かな実を結ぶ。自分の命を愛する者はそれを失い、自分の命を憎む者は永遠の死に至る」の一編を思い起こさせる。(古賀順子記)